

口語詩句 202212

龍 秀美

＜選評＞

とりたてて短歌的でもなく俳句的でもない、いわば口語詩句的な作品が多くなってきた感じがする。時代が変われば必然的に文学も変わるため、現在の世界情勢から自然に新しいかたちが生まれてくるということが考えられる。加えて、若い世代を中心にさまざまな短詩形を試みる場が増えてきたことで、かえって自分のスタイルが絞られてきたことがあるのではないか。

＜推薦作品＞

我が家に

どんぐり奉る者あり

南風 東京都

——窓辺にポツンとどんぐりがひとつ。人為が一切入っていない自然からの、何気ないが貴重な贈り物。

柿ひとつ

もぎ取るように憎しみを

受け入れている

生きるしかなく

まちりこ 埼玉県

——自ら“もぎとるように”受け入れるしかない。憎しみも生も。

女でも男でもない桃を剥く

まちりこ 埼玉県

——“女でも男でもない”のは桃か、剥いている人か。それを見ている作者か。

人間は余白がすきだ

オレンジを剥くとき

指を嗅ぐようなこと

旭日 百 滋賀県

——なんでもない仕草は余白のようだが、余白が無いと字も絵もかけない。少々のエロスも

余白に。

富士山を見るたびに
富士山だ！と叫ぶことが
どれだけ大事だったことか

茶和鈴 東京都

——当たり前のことが当たり前に言えなくなる。そんな時代がくるのか？

メルカトル図法のロシア去年今年

李いう子 佐賀県

一極へいくほど不自然に拡大するメルカトル図法。システムに固執するとそうなるのかと
気づく。

コーラを飲んで

コーラを飲んだ

私に

山本先生 東京都

——飲む前と飲んだ後は違うわたし。飲まれたコーラはどうなる。

私たちのためのあなたの墓

私たちが去るまで
そこにいることとする

池上根元 千葉県

—墓は生きている者のためにあるのだろうか。死者の側から寄り添うためだろうか。悲しみを迎えてうたう歌。

降り注ぐもみじは永久機関かも

松の梢 大阪府

—深紅のただなか。時間も空間もなくなり、永久に続くような世界。日本人が古くから花と紅葉に持つ感性。

付き合ってもなんともない
恒温動物だし

小井 詩文 京都府

—異性というのは時々まったく違う生き物のように感じことがある。だから、自分に言い聞かせて自分を励ます。

しゃぼん玉
ぜったいそんなことはない

土田 真央 滋賀県

—“しゃぼん玉”のはかなさと“ぜったい”的強さがお互いを引き立て合っている。言葉はときどきこんなことができる。

生まれてきてごめんなさいと
打った時サジェストされる
ごめんの絵文字

手塚桃伊 東京都

—現代のひとつの風景の発見。言葉の重さと記号の軽さをどう扱っていくか。